

図1 アユの体長 (SL)

真夏でもとれた！今年の霞ヶ浦・北浦のアユ

アユは秋生まれの年魚で、近年増加した霞ヶ浦・北浦では4月下旬頃になると体長約9cm(約10g)に成長した食用サイズのもものがとれ出し、5月～7月中旬頃までが漁の盛期となります。例年7月下旬以降湖内でとれなくなるのは、霞ヶ浦・北浦の水温が梅雨明け以降の真夏に30℃位まで上昇し、アユにとっては高すぎる(28℃が限界と見られている)ので、ほとんどが水温の低い流入河川に遡上してしまうためと考えられています。

ところが、今年は7月の梅雨明け以降も湖内にアユが多く分布し、張網や曳網でまとまって漁獲されました。この傾向は秋まで続き、玉造町地先の張網では10月上旬現在で1日1網で1kgものアユがとれている所があります。この原因として、昨年秋の残暑が厳しく、アユの産卵期が遅れたため、その後の発生や成長が遅く、流入河川への遡上も遅く推移したことが考えられます。図2に12月に湖内に分布するのアユ稚魚の体長組成を示しました。昨年12月のアユ(現在とれているアユの稚魚期)の体長は前年同期に比べて平均値で1cm小さかったことが分かります。また、同様に5cm前後の大型の稚魚が少なかったことも主産卵期が遅くずれた結果と見られます。

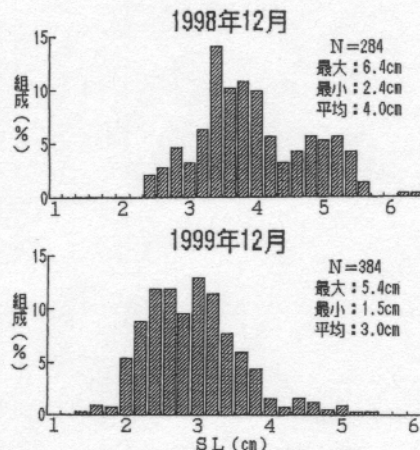


図2 霞ヶ浦でのアユ稚魚の体長組成



図3 アユに付いたイカリムシとその付着痕

この結果、例年梅雨時期までの増水刺激で流入河川にのぼるアユが、今年のはのぼれずに梅雨明けを迎え、のぼりそびれてしまったものが多くいたと見られます。更に梅雨明けが平年より早かったことや、8月に雨があまり降らなかったことも影響したのではないかと考えられます。例年だと梅雨明け以降も大雨が降れば川が増水し遡上刺激になると見られますが、今年はその機会が極く少なかったわけです。

真夏に湖内に残留していたアユはやせていて、体表に小さな赤い穴が空いているものが多く見られました。これは、イカリムシが付いた跡です。高温にさらされ生理的に弱くなったアユは、イカリムシが付き易くなっていたと見られます。イカリムシは夏を中心に多く発生するケンミジンコの仲間で、メスはコイやフナなどの魚に寄生して大きくなります。しかし、人が食べても害はありません(図3)。

一方、流入河川の6月～8月のアユ釣りは湖内残留群が多かったためか、例年に比べ釣獲数が少いようでした。ところが、9月上旬になってようやくまとまった雨が降り、この雨の後恋瀬川などの流入河川においてアユがたくさん釣れました。この時釣れたアユはやせていて体にイカリムシが付いていたり、その付着痕があるものが多く見られました。流入河川にはイカリムシのもととなるプランクトンが少ないため、通常そこにいるアユにはほとんどイカリムシの付着が見られません。したがって、この時釣れたアユの多くは秋になって霞ヶ浦・北浦からのぼってきたものと見られます。イカリムシが遡上魚の標識になり、9月の雨による河川が増水が遡上刺激になったことが分かったのです。

問題は、10月上旬現在でも霞ヶ浦にアユが多く残留していることです。これまでの調査で霞ヶ浦・北浦のアユの産卵場は流入河川中流域の底質条件が良い極く限られた場所以外見つかっておらず、今湖内にいるアユが産卵場に到達し、子孫を残せるかが心配です。霞ヶ浦・北浦のアユは厳しい条件下で奇跡的に増加した魚であり、気象条件がおかしくなるとなくなる可能性があります。私たちが今後もアユの生息を望むならば、産卵場である川の環境を良くしたり、産卵期のアユをなるべく保護する(釣りなどで採らない)必要があると言えます。

(担当：河川部)

内水面水産試験場一般公開のお知らせ

茨内水試図

今年も県民の皆様にも本県河川湖沼の環境や生物、漁業や当場の業務について理解を深めていただくために、下記のとおり当場の一般公開事業を開催することとなりましたので、ご案内申し上げます。

記

日時：2000年10月29日(日) 9:00～16:00

場所：茨城県内水面水産試験場(行方郡玉造甲1,560 霞ヶ浦ふれあいランドとなり)

催し物・講演(13:00～)「霞ヶ浦の漁業と魚種の変遷」

- ・魚とり教室(14:00～)霞ヶ浦の魚をとって観察しよう！先着30名(当日受付で整理券を配布します。)
- ・ミニ水族館「霞ヶ浦で減ったさかな・増えたさかな」
- ・淡水魚食PRコーナー
- ・おさかなタッチコーナー・・・など